

2024

A N N U A L
R E P O R T

活動報告書

Manabi to
認定NPO法人 まなびと

まなびと10年の 振り返り

10

A Decade in Review

立ち上げの思い

2014年1月、私たちは「自分たちに何ができるかを、活動しながら学ぼう」という合意だけを握りしめ、任意団体として動き始めました。子どもの居場所を見つけれなかった体験と、そんな自分をそのまま受けとめてくれた大人のまなざしが、まなびとの種になっています。

だからこそ——やりたいことがまだ見つからなくても安心していられる場所とそこで多様な人に出会える機会を届けたい。その願いから、地域の子どもの向け学習支援教室と、留学生向け日本語教室という二つの小さな活動が生まれました。

立ち上げ期の様子

学習支援教室には「塾はいやだけど来てもいい？」と手ぶらで訪ねてくる子が少なくありませんでした。1時間ずっと絵を描く子、アニメ談義に夢中になる子——好きなことに没頭できる安心感が芽生え、やがて宿題や進路の相談も自然に始まります。一方で保護者の「勉強してほしい」という期待とのギャップも浮かび上がり、遊びを通じた関わりを主軸にした居場所の必要性を感じるようになりました。

学習支援の活動は、週1回さまざまな場所を借りて転々と実施していたため、「子どもたちの日常の中に据えられる拠点」と「地域の人が行き来できる接点」を持ちたいという声スタッフがあいだで高まっていきます。

同じ頃、日本語教室では授業についていけず孤立していたベトナム人留学生と「おしゃべりしながら日本語を覚えよう」と対話を重ねるなかで、勉強より“友だち感覚でつながる”居場所づくりの手ごたえを得ました。

余白をあたたくし続けるために

設立10年を迎え、私たちはこれまでの歩みを振り返りつつ、これからの10年に向けて新たなチャレンジを始めました。

取組みの軸	現在地	次の一歩
組織化を進める	常勤・非常勤合わせて25名、 学生ボランティア約20名、多様なスタッフが協働	評価・育成制度を整え、 学びながら働ける組織へアップデート
安定した財源の確立	助成金・寄付・クラファン・事業収入のミックス	企業協賛・企業版ふるさと納税・研修サービスなど “共感を資源に変える”仕組みを拡充
届けたい価値を表現する	SNSとちいき食堂で当事者の声を発信	ドキュメンタリー動画や研修プログラム、 コミュニティーセンターの開設で“待ち時間”の 豊かさをやさしく社会へ届ける

まなびとが届けたい“待ち時間”は、社会の余白をあたためること。

まだ価値が見つからない芽を受け入れ、そと育てながら、新しい社会と一緒に創っていきます。

北野との出会い

2015年、神戸市中央区北野エリアで活動していた北野婦人会と巡り合います。ここは小学校と学童がなく、放課後の子どもの居場所が長く課題でした。私たちの「遊びを通じて子どもと向き合う」構想に共感いただき、

2015年 地域イベントにブース出展

2016年 週1回の遊び場〈神戸こども探険隊〉開始

2017年 学童保育を本格スタート——拠点も北野へ移転

という流れで常設拠点が生まれます。これにより日本語教室〈だんらん〉も安定し、集った人びとが定期的に交わる「ちいき食堂」も誕生。“安心と多様な出会いの循環”が街角に根を下ろし始めました。

コロナ禍で

2020年、感染症拡大は活動を大きく揺らしました。学童保育は長期休校に合わせて朝から夕方まで開所。手探りの感染対策を続けながら、子どもや保護者の「ここがあって良かった」という言葉に背中を押されます。学童の価値を再確認した私たちは、活動を一本化しくまなびと北野基地」という一棟貸しのビルへ移転。放課後をさらに伸び伸び過ごせるよう環境を整えました。日本語教室は全面オンライン化。対面が難しい時期でも「誰かと話す時間」を継続し、柔軟な形での居場所提供の意義を深める機会になりました。

居場所の外とつながる

コロナ収束後は“外へ踏み出す”挑戦が加速しています。子育て世帯向け食糧支援の受託や、生田川東エリアでの遊び場づくりを通じて、これまでとは異なる地域・家庭と出会う窓口が広がりました。

外国人分野では、留学生への月100人規模の食糧支援を足がかりに生活実態を聞き取り、住まいと就労を一体で支える〈留学生シェアハウス〉を開設。現在30名が暮らし、地域企業と連携した“人と関わるアルバイト”にも挑戦中です。

そして再開したちいき食堂では、子ども・留学生・学生ボランティア・地域住民が同じ鍋を囲み、言葉や文化を分かち合う光景が日常になりつつあります。

まなびとについて

やりたいことが見つかるまでの“待ち時間”

やりたいことがはっきりしていると自分が何をすべきかが明確になったり、周りの人がアドバイスをしてくれたりする。思い描いたことが形になり、人生が前に進み始める。一方で、やりたいことが見つからないと、自分が何をしたらいいのかが分からず、周りもどうやって手を差し伸べたらいいのか分からなくて、状況が変わっていかない。人生が同じようなことの繰り返しで、歳を重ねる内に周りの人にはおいていかれているような感覚になり、徐々に孤立して、世界が縮小していつか。そうになると、新しい刺激が少なくなって、やりたいことが見つかりづらい状況にどんどん追い込まれてしまう。

まなびとは、やりたいことが見つからない人でも「あなたはあなたで居ていい」と受け入れられる居場所と、新しい価値観や生き方に出会える多様な人との関わりがある、“待ち時間”を大事にしています。やりたいことがなくても、居場所を得ながら自分のペースで世界と出会っていくことで、ひょっとしたらいつかやりたいことが見つかるかもしれないという前向きな気持ちで日々を過ごすことができる。やりたいことが分からない人でも、“待ち時間”があることで「生きよう」と思える、そんな社会にしたいと考えています。

コンセプト

VISION
ビジョン

誰もが自分の可能性を信じ、安心して歩み続けられる社会へ

「まなび」で出会う多様な選択肢から、誰もが「自分らしい人生」を過ごせる世の中を目指して

MISSION
ミッション

すべての人に、やりたいことが見つかるまでの「待ち時間」を提供する

ひとりひとりの未来につながる「今の自分を受け入れてもらえる居場所」と「多様な価値観に触れて人生を自己決定できる学び」を、全ての人に届けます

VALUE
バリュー

安心 [一人ひとりの存在を認める]
多様性 [個性を活かす]
主体性 [自分の“したい”を大切に]
関わり合い [他者に対して一歩を踏み出すコミュニケーションをとる]

Manabi to

まなびとが運営しているプロジェクト



The Value Manabito Offers



親子会であるまじろの看板作り

あるまじろ1年目のあゆみ

コンセプト —— 名前に込めた願い

アルマジロの巣穴は、留守のあいだ他の動物の安全なすみかになり、生態系を豊かにするといわれます。“あるまじろ”という名前には、そのエピソードと「放課後等デイサービスが地域にもたらす居場所の連鎖」を重ねました。私たちは「やりたいことが見つかるまでの待ち時間」を子どもに届けるまなびととして、発達に特性を持つお子さんが社会に合わせるだけでなく、“自分らしさ”を大切にしながら社会へ一歩踏み出せるワクワクの拠点を目指してサービスをスタート。安心して過ごせるようになったその先で、「これが好き!」「こんなことに挑戦したい!」と自然に言える子どもを増やしたい——それがあるまじろの原点です。

最初の一步 —— とっかかりは〈モルック〉

決まったプログラムを置かず一人ひとりの「やりたい」を掘り起こす——簡単そうで、立ち上げ直後は手がかりが足りず子どもも職員も戸惑いました。そこで導入したのが、数あそび・身体協働・コミュニケーションを自然に含むモルック。木のピンを倒す共通の目標が笑いを生み、初対面の距離が一気に縮まりました。この体験を足がかりに興味はオセロやトランプ、工作、塗り絵へと広がり、子どもたちは「自分の好き」を少しずつ言葉にしはじめました。

試行錯誤の一年 —— 「やりたい」が跳ね合う居場所へ

好きなことを存分に楽しめる安心感が土台になると、挑戦とつながりが自然に広がりました。鳥の細密画を描くお子さんは完成作を入口のガラス窓に貼り、通りかかった近所の中学生が「すごい!」と足を止めたことと静かに頬をゆるめました。秋にはまなびと10周年イベントで作品を展示し、来場者の感想が次の制作意欲へ。さらにまなびと文化祭 WASSHOI! ではワッフル屋を企画し、売り上げで念願のブロックを購入。“やりたいことが実現し、成功体験が次の挑戦を呼ぶ”循環が芽生えた一年でした。

スタッフ視点の学び —— 制度を知り、もう一度“直接支援”へ

立ち上げ期は制度や加算要件の学びが欠かせず、全体を俯瞰できた反面、直接支援の時間が薄くなる場面もありました。二年目は子どもと向き合う時間をもう一度厚くすることを大きなテーマに掲げています。座談会や親子会など自由に試せる文化が職員の挑戦を後押ししました。これからは地域の子どもや同業者と交わるイベントを開き、あるまじろを起点に多様な出会いを生む種まきを続けていきます。



WASSHOI!の準備

あるまじろ活動報告

居場所・息抜き・やりたいことを選べる時間

学校帰り、子どもたちは「今日は何しようかな」とつぶやきながら玄関をくぐります。静かに絵を描ける机、体を動かせるコーナー、スタッフと話せるソファ——気分に合わせて場所も遊びも自由に選べる環境を整えました。「ここなら自分のペースで楽しめる」という感覚が広がり、利用回数も週1から週2・3へ増えるお子さんが目立ち、安心して過ごせる居場所として根づきつつあります。

“好き”がひろげたつながり

鳥の細密画が好きなお子さんは作品を入口のガラス窓に貼り、近所の中学生が足を止めて見入る様子を知ると静かに頬をゆるめました。学校でも頼まれた絵を配る準備を進め、好きなことが人との関わりを生むきっかけになっています。まなびと文化祭 WASSHOI! でワッフル屋を開いたグループは、売り上げでブロックを購入し「次はどんなお店にしよう」と話し合いが続きました。安心して好きに打ち込める時間が、挑戦とつながりを自然に育んでいます。

開かれた場所への一歩—地域・保護者・仲間と育てる輪

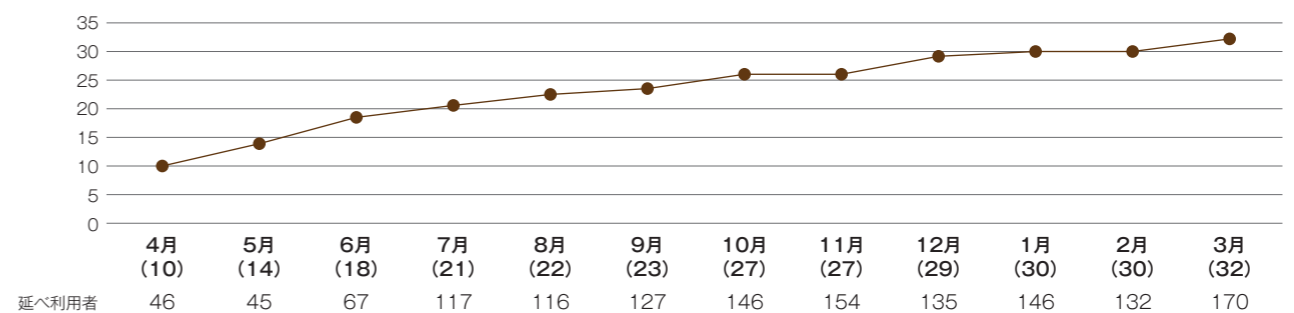
形式ばらない座談会や親子会を開いたことで、保護者や相談支援専門員が気軽に顔を出し、新しい利用相談にもつながりました。スタッフは「子どもがいろいろな人と出会える場にしたい」と考え、公園で近所の子どもたちと遊んだり、そこで出会った子をイベントに誘ったりしながら輪を広げていきたいと思っています。同業者とも情報交換が始まり、自由時間をどう支えるかを語り合う機会を模索中です。2025年度は地域や保護者がもっと気軽に立ち寄れる“開かれた居場所”を育てていきます。



福笑いイベントでお面を作りました

活動日数	276 日
利用登録数	33 人
利用のべ人数	1836 人

月間利用者数・月間延べ利用者数の推移グラフ





ローソク作り

おやつタイム

アイスクリーム作り

場としての安心——火を起こさない関わりへ

年度のはじめ、スタッフは「安全第一」の思いから注意を増やしましたが、気づけば声かけが「ダメだよ」ばかりに偏り、放課後の空気が硬くなってしまいました。そこで「火がついたら消す」より「そもそも火を起こさない」コミュニケーションへ転換。公園へは子どもと横に並んでおしゃべりしながら歩き、帰り支度も遊びの流れを断ち切らないようにすると、子どもたちは「ここでは自分をそのまま出していいた」と感じられるようになったように思います。

個々の安心——表現をていねいに掘り起こす時間

安心感が芽生え、ケンカや強い言葉も「わたしを聞いて!」という合図に映ります。北野くん家では暴力になりそうときだけきちんと止め、その後は一対一でじっくり気持ちを探ります。言葉がまだ少ないお子さんもいるため、「うまく説明できなくても大丈夫、一緒に探そうね」と寄り添い、表情や仕草を手がかりに本当の願いを言葉にするお手伝いをします。うまく表現できている間は当事者に任せ、行き詰まれば周りの人が交通整理に入り、再び子ども主体へ戻す——そんなやり取りを重ねています。

主体性を映す“学生フィードバック”

子どもたちの主体性を伸ばすには、大人も“主語=私”で動く姿を見せることが欠かせません。今年は関わる学生スタッフに「あなた自身はこの場で何をしたいの?」と問いかけ、自分の得意や好きなことを率直に持ち込んでもらうようにしました。学生がまずエゴを開示し、「自分はこう関わりたい」と言葉にすることで、子どもたちの「じゃあ私はこれがしたい」という気持ちを引き出す土壌が生まれています。スタッフも同じ目線で試行錯誤を共有し合い、エゴを認め合う場こそが安心感と貢献度を高める——そんなマインドを少しずつ根づかせているところです。

保護者・地域と広げる“次のひとまわり”

放課後の挑戦をさらに豊かにするため、保護者や地域の大人と喜びを共有する輪を広げることが次の課題です。2025年度は日々の活動を写真と短いコメントで家庭に届け、ケンカをどう乗り越えたか、どんな遊びが生まれたかを具体的にシェアすることにチャレンジします。また、小さなイベントを計画段階から保護者に伝え、一緒に応援や準備に関わってもらう機会を増やしたいと考えています。地域の大人にも気軽に立ち寄ってもらえる仕組みを整え、子どもたちが自分の意見を場に反映できる経験を重ねられるよう、放課後の輪をもう一回り大きくしていきます。

活動日数 **277** 日
利用登録数 **90** 人
利用のべ人数 **000** 人



WASSHORIの準備

活動日数 **111** 日
参加のべ人数 **333** 人

活動日数 **111** 日
利用登録数
利用のべ人数 **333** 人



ツナガリ Music Lab.

子どもたちの『できた!』が広がる教室

ツナガリ Music Lab. (以下ツナガリ)は、株式会社人と音色が提供する音楽プログラムです。まなびとではそのプログラムを導入し、2021年から神戸・北野で教室を開いています。ツナガリが掲げる「自己肯定感を育む」という理念に共感して通ってくださる子どもたちは、教室での活動を重ねるなかで少しずつ自信を深めています。通い始めの頃は、一度つまずいただけで「こんな難しいのはできない」と諦めがちだった姿が、今では「今はできなくても、そのうちできる」と自分を信じて粘り強く挑戦できる姿へと変わってきました。こうしたチャレンジを支える土台には、「ここは楽しくて安心できる場所、先生のことも大好き」という信頼関係があると感じます。

おうちの方と手を取り合って

ツナガリのレッスンには保護者の方にも参加していただけます。お子さんによっては「そばにいてほしい」こともあれば、「いないほうが集中できる」こともあるため、前半だけ同席／後半は別室など毎回相談しながら環境を決めています。レッスン後は必ず「今日はこういう意図でここまで試しました。あと2回続けてみますね」と経過と次の作戦をお伝えし、ご家庭や学校での様子も伺います。言葉で気持ちを伝えにくいお子さんでも、スタッフと保護者が情報を持ち寄ることで内面を想像しながら試行錯誤を続けられる——そんな二人三脚の関係が築けていると感じます。

スタッフも一緒にチャレンジ

私たちスタッフも、子どもたち一人ひとりの「今できること」と「次に届きそうなステップ」を描きながら支援の幅を広げています。「椅子に座れないなら立ったままでもOK」「音程にこだわらずリズムだけでやり取りしてみよう」といった柔らかな発想転換や、ABA(応用行動分析)の視点を取り入れたプログラム調整を重ねてきました。十分な準備とシミュレーションで自分の緊張をほぐし、子どもたちの小さな変化と一緒に喜べる余裕も少しずつ育っています。「できるステップに落とし込む → 成功体験を積む → 自己肯定感を育む」というツナガリの合言葉は、スタッフ自身の学びにもつながっています。

教室をこえて芽吹くつながり

放課後等デイサービス「あるまじろ」がスタートしたことで、ツナガリと学童・放デイを往来するお子さんが増えました。待ち時間に学童の子どもとボードゲームを楽しんだり、ドラムが得意な子が即興ライブを始めたりと、音楽や遊びを通じた自然な交流が少しずつ芽吹いています。2026年度からは学童と放デイを同じ建物で運営する新しい試みも始まる予定です。「教室が違って、まなびとの中でつながっているんだ」という体験を子どもたち自身が広げていけるよう、私たちも伴走していきます。

利用実数 **4** 人



ネパールカレー交流会

「住まい」を通じて、日常に寄り添う支援へ

コロナ禍以降、「まなびと」は生活が不安定になりやすい外国人留学生に対し、月1回の食糧支援を行ってきました。食糧の提供とあわせて、生活相談窓口を設置し、地域住民との交流の機会も生まれましたが、支援はどうしても“点”にとどまりがちで、「地域との継続的な関わり」が十分に行き届かないことに課題を感じました。そこで2024年4月、「暮らしそのものを支援のフィールドにする」という新たな一歩として、外国人留学生向けシェアハウス「ペンギンズ」をスタートしました。

ペンギンズでの取り組みと工夫

神戸市内の6階建てマンションの1～3階を活用し、段階的に改修を進めながらシェアハウス「ペンギンズ」の運営をスタート。2024年4月にまず3名の受け入れを開始し、年度末までに延べ30名の外国人留学生がこの場所で生活をともにしました。

暮らしの中での学び、つながり、そして自立を育むため、ペンギンズではさまざまな工夫を重ねてきました。

■ 日本語教室「だんらん」

学校やアルバイト先以外でも日本語に触れられる場として、5月からシェアハウス内で「日本語教室だんらん」を月1回開催。当初は学習の補助的な

位置づけでしたが、次第に母語で固まりがちな環境から一歩抜け出し、日本人と自然に関わる機会として機能するように。

ニーズの高まりを受けて、7月からは週1回の定例開催に拡充。現在では、言語の習得にとどまらず、日常的なコミュニケーションの土台づくりにもつながっています。

■ 地域交流の機会づくり

月1回、シェアハウスの内外で地域の人々との交流会を開催。和食づくりやゲーム、季節行事などを通じて、カジュアルな交流の中で、住民との距離も少しずつ縮まっています。

「名前を覚えてもらった」「道で声をかけてもらえた」など、小さな接点の積み重ねが、「地域の一員である」という実感へとつながっています。

■ 「ホームルーム」の導入

開所当初に直面した課題のひとつが、掃除当番制の運用。うまく回らない時期もありましたが、月に1回全員で清掃を行う「クリーニングデイ」を導入したことで、集まって話す・動く機会が生まれました。

やがて「掃除だけじゃおもしろくない」という声から、入居者同士のコミュニケーションやルールづくりも行う「ホームルーム」へと発展。住環境を自分たちで整える意識が育ち、自治力も育っています。



まなびと10周年イベント



シェアハウスのホームルーム



クリスマスパーティー



ナイトピクニック



たこ焼きパーティー

見えてきた課題と今後のチャレンジ

■ 雇用と地域との接点の両立

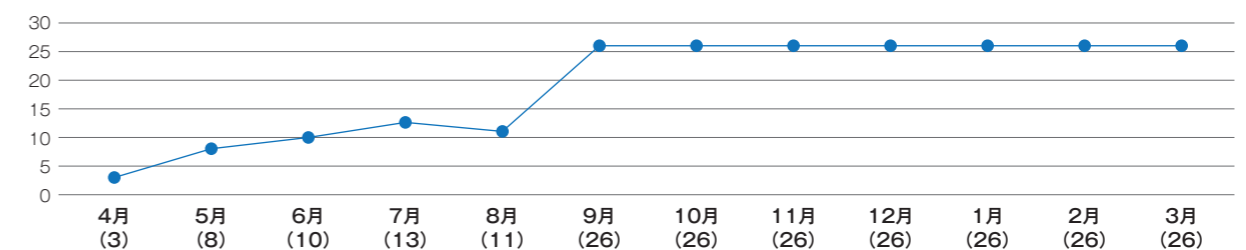
今年度、シェアハウスという暮らしの場を通じて、地域に暮らす外国人留学生一人ひとりの人となりや関心、想いが見えてくるようになりました。

中には、「本当はもっと地域のイベントやボランティアに関わってみたい。でも生活のためのアルバイトが優先になってしまおう」と話してくれる入居者もいます。

こうした声を受けて、今後は、雇用と地域活動が両立できる新たな機会づくりに取り組んでいきます。たとえば、地域の飲食店や商店などと連携し、留学生が地域の中で働き、地域とつながるような雇用支援の仕組みを構想中です。

「地域で暮らし、働く」という循環が生まれることで、支援を超えた共に生きる関係性を築いていきたいと考えています。

月間入居者数の推移グラフ





日本語教室だんらん(対面)

「日本語で話せる友達」を目指して2014年より継続してきた日本語教室だんらん。2024年度は、週2回の教室運営を軸にしながら、より大学生のチャレンジの場として位置づけ、各曜日に学生のプロジェクトリーダーを立てて活動を行いました。リーダーたちは、毎回のスタッフミーティングや振り返りの運営、新規参加者の対応などを担い、月に1度のリーダーズミーティングでは、現場での悩みや工夫を共有する機会を設けました。

活動を通じて、リーダー自身の成長も感じられました。ある学生は、「自分の言いたいことを明確に伝えることの大切さに気づいた」と語り、意思疎通を意識した関わりによって教室全体に活気が生まれたと振り返っています。

学習者側にも良い変化が見られました。長く参加していた留学生のひとりが、日本語教室だけでなく「ちいき食堂」にもボランティアとして参加するようになり、外国人と接することに慣れていない地域住民とも積極的に関わる姿が見られました。だんらんで育まれた関係性が、他の地域活動へと自然につながっていく好事例となりました。

また今年度は、外国人留学生向けシェアハウス「ペンギンズ」でも日本語教室を実施しました。当初は月1回の開催でしたが、より日常的な日本語学習

のニーズに応えるため、7月からは毎週開催へと拡充。参加者数の確保には苦労したものの、大学生ボランティアが主体となって、カードゲームやかるたづくりなど、日本語を使って楽しめるコンテンツを工夫し、参加のハードルを下げる取り組みを行いました。さらに、ペンギンズのホームルームにも出向き、入居者との関係づくりに努めるなど、教室運営にとどまらない主体的な関わりが広がりました。

今後も、ただ日本語を学ぶ場としてだけでなく、日本人との関係性や自己表現の機会を育む場として、学習者・ボランティアの双方にとって意義ある教室を目指していきます。

活動日数	94日
登録実数	45人
参加のべ人数	334人



日本語教室だんらん(オンライン)

コロナ禍をきっかけに始まった「日本語教室だんらん(オンライン)」は、外出が制限されていた時期にも、自宅から日本語を学び、人とつながることができる居場所として機能してきました。開始当初は神戸市外からも学習者・スタッフが集まり、多くの出会いがオンライン上で生まれました。

しかし、コロナの状況が落ち着き、日常が戻り始めるとともに、スタッフ数が徐々に減少していきました。2024年度は、そうした状況の中でも「安心して続けられる場所」であることを大切に、学習者にとってスタッフにとっても、継続できる関係性づくりを意識した運営を行いました。

その工夫のひとつが、見学・体験フローや説明会の実施です。初めて参加する人に対しては活動の趣旨を丁寧に伝え、また継続して参加してくれているスタッフには、積極的に声をかけるなどの関係づくりを行いました。さらに、日本語を教える担当と運営を支える担当を明確に分けることで、役割を持って関わる仕組みを整えました。

活動に4年間関わってくれた大学生スタッフの中には、自身の変化を語ってくれた方もいます。はじめは「国際交流がしたい」という気持ちで参加していたものの、大学で移民や難民の現状に触れたことで、「自分にできることを、少しずつでも」と継続を決意。これまで「前に行く」ことが得意だった彼女が、だんらんで「支える側」にまわる経験を通して、自分の新しい得意に気

づいたと話してくれました。教えるスタッフから「あなたがいてくれて助かった」と感謝され、サポート役の喜びを実感したことは、就職活動の軸にもつながっていったといいます。

また、オンライン教室の閉鎖が決まった際には、「これからも日本語の勉強を一緒に続けよう」と学習者と個人的に約束を交わす場面もありました。だんらんがただの教室ではなく、信頼関係のある居場所となっていた証でもあります。

「またきっと、みんなで会える日があるはず。」そんな明るい言葉とともに、2024年度をもってオンラインだんらんは幕を閉じました。画面越しの出会いから生まれた小さなつながりが、これからもそれぞれの場所で静かに続いていくことを願っています。

活動日数	123日
登録実数	19人
参加のべ人数	324人





子どもたちに届けたいこと

今年度は偏食気味のお子さんが多く見られ、「慣れた物だけを選ぶ」傾向がありました。そこでちいき食堂では、好き嫌いに合わせて献立を削るのではなく、「少しでも挑戦できる工夫」を重ねる方針に変更。苦手な野菜をポタージュにする、春巻きの具材を一本だけ変えてみるなど、小さなアレンジを続けました。その結果、「前は食べられなかったけれど今日は食べられた!」という声が少しずつ増えています。夕食ができる匂いとともに関わす「いい匂いだね」「デザートは何か?」といった会話は、家族の食卓に似た“見守られている安心感”を子どもたちに届けていると感じています。

ボランティアとの関わり

当初は「配膳して一緒に食べて終わり」という形が多く、料理そのものへの関心やスキルが十分とは言えませんでした。そこで、メンバーごとに調理目標と担当工程を可視化したマニュアルを作成し、参加のハードルを下げました。細かく分担したことで、料理経験の少ない大学生も「一品を自分の手で完成させた」という達成感を味わえるように。また、ムスリムやユダヤ教の留学生と一緒にナツメやピスタチオを使った料理を作り、アレルギーにも配慮しながら食文化を紹介し合う時間が生まれています。こうした経験を通じて、“子どもと主体的に関わりたい”というボランティアの気持ちが具体的な動きへと変わりました。

よりソーシャルな場にするために

ちいき食堂は、子どもだけでなく大人にとっても“社会につながる入り口”になり得ます。今年度は保護者がボランティアに参加するケースが2件あり、家庭や職場以外で「自分の時間」を持つきっかけになりました。2025年度は、活動の様子を写真と短いコメントで発信し、「ちょっと手伝ってみようかな」と思える人を増やすことに挑戦します。また、海外在住の知人の親戚が来日予定であることを生かし、アメリカや台湾、中国、シリアなど多国籍の家庭料理と一緒に作る日を企画中です。子どもたちが世界の食と出会い、大人は子どもに関心を寄せ、音楽や会話を交えて交流する—そんな予防的ソーシャルワークの場として、ちいき食堂をさらに育てていきます。

活動日数 **96** 日
 子ども参加のべ人数 **679** 人
 子ども以外参加のべ人数 **663** 人



今年もたくさんの方が参加してくれました

まなびと文化祭WASSHOI!

「これが好き!」「これが得意!」があふれ出す日

WASSHOI!は、年に一度、まなびに関わるすべての子どもや外国人が、自分の「これが好き!」「これが得意!」を自由に表現するおまつりです。

「北野くん家」や「あるまじろ」の子どもたち、「日本語教室だんらん」や「シェアハウス ペンギンズ」の外国人たちが、それぞれの想いや得意を持ち寄り、文化の違いや年齢差もごちゃまぜのまま、ゆるやかに繋がりが、楽しみ合う時間が生まれました。

にぎわいのブースにぎわいのブース ——遊びもお宝も、みんな持ち寄り

会場には、子ども・外国人・地域の人たちがそれぞれのアイデアで開いたブースがずらりと並びました。

チャリティバザーブースでは、「家にあるけど誰かの役に立つかも」と集まった品々が並び、まなびとの活動を支える資金に。子どもブースでは、ストラックアウトやブロック実験コーナーが登場し、「いらっしゃいませ!」の声が元気いっぱい響きました。

ミャンマー文化紹介ブースでは、天然の万能化粧品「タナカ」の体験に、初めて触れる人たちが興味津々。

飲食エリアでは、ベトナム料理店コムコカさんが出店し、バインミーやランチボックスを販売。いつかカフェでアルバイトをしたいと話していた留学生が、笑顔で店頭に立ちました。

「子どものおやつブース」では、北野くん家やあるまじろに通う子どもたちが、焼きバナナケーキやワッフルを手づくり販売。「おいしい!」の声に、照れながらも嬉しそうな表情を見せてくれました。

そしてもうひとつ、終日人気だったのが「おもちゃつき体験」。神戸ワイズメンズクラブさんの協力のもと、べったん、べったんと杵の音が響くたびに、「やってみよう!」と列ができました。

子ども外国人も交代で杵を握り、「よいしょー!」のかけ声とともに笑顔がはじけ、いつの間にかその場にいた人たちが一緒に応援する輪ができる——そんな温かな風景が広がっていました。

ステージから広がる“わたしもやってみよう”の輪

WASSHOI!のステージは、“発表”ではなく“巻き込み型”。

今年は北野くん家のスタッフがよさこいを披露すると、子ども外国人も次々と飛び入り参加し、自然と会場に大きな踊りの輪が生まれました。

ミニステージでは、NPO法人てんびんさんによるアニメーション人形劇を上演。子どもたちは真剣な表情でじっと見つめ、作品を通じてパーキンソン病についても自然に理解を深めていきました。

まなびとバンドのステージでは、留学生によるドラム演奏「思い出を駆け抜けて」に始まり、「ツバメ」「上を向いて歩こう」の合唱へ。ことばや文化を越えて、想いのこもった音楽が会場いっぱいに響き渡りました。

来年のWASSHOI!も、また一緒に!

次回の「まなびと文化祭 WASSHOI!」は、2026年2月11日に北野ノスタにて開催予定です。この1年間を通して育まれる、子どもや外国人一人ひとりの「好き」や「得意」、「やってみよう!」を表現できる場として、またコツコツと準備を重ねていきます。来年のWASSHOI!も、どうぞよろしくお願いいたします。

参加人数 **194人**
スタッフ人数 **54人**



2024年度を振り返って

認定 NPO 法人まなびと 理事長 中山 迅一

放課後等デイサービスの開設 — 多様な子どもたちがほっとできる次の居場所

長いあいだ温めてきた放課後等デイサービス事業を、ようやくスタートできました。

学童保育で大切にしてきた「子ども主体」の空気をそのままに、発達の特性を持つ子どもたちがいっそう安心できる環境を整えたことで、専門性が学童にもにじみ出る良い循環が生まれています。

留学生シェアハウスの立ち上げ — “ともに暮らす” ところから始まる支え合い

コロナ禍後に始めた外国人留学生支援は、今年度、留学生シェアハウスという形に育ちました。

住まい・生活相談・地域とのつながりを一か所で編み直せる拠点ができたことで、支援が「単発」から「継続」と「発展」へ。地域の方々から「留学生と一緒に何かしたい」という声も届きはじめています。

ちいき食堂の成長 — “待ち時間” を囲む食卓

子ども、留学生、地域の大人、学生ボランティア—立場も文化も年齢も違う人たちが、今年がちいき食堂に継続的に集まってくれるようになりました。

同じ鍋からよそうスープの湯気といっしょに、言葉や経験が行き交う光景は、まなびとが思い描いてきた“待ち時間”そのもの。

「待ち時間」をもう一度見つめ直して

10年という節目を迎えた今年、自分たちが届けてきた「待ち時間」の意味をあらためて考えました。

ありのままという言葉は、ときにキラキラしたイメージで語られます。けれど人の姿はもっと複雑で、ときにドロドロで、感情的で、荒っぽい部分も含まれています。その一切を否定せず、「今ここにいる」ことを一緒に味わい、育ててくれる余白—それこそが私たちのめざす“待ち時間”だと気づかされた一年でした。

自然と向き合うとき、晴れも雨も災いも恵みも「ただ在るもの」として受け止めます。人と向き合うときも同じように、うまくいかない瞬間ごと抱えながら、かけがえない今を共に生きる。その営みを来年度も丁寧に続けていきます。

2025年度に向けて—“待ち時間”を育むコミュニティへ

2024年度に芽生えた放課後等デイサービス、留学生シェアハウス、ちいき食堂という3つの動きは、子どもや外国人が「いま」の自分を受け止めてもらいながら少しずつ次の一歩を見いだす場として根つき始めました。2025年度は、この芽をやわらかく大きく育て、“待ち時間”をもっと多様な人にひらく一年にします。

まずは北野基地をはじめとする拠点や既存プログラムを、コミュニティセンター的に開放します。学童の子ども、シェアハウスの留学生、地域の大人—これまで別々に関わってきた人たちが、気軽に顔を合わせたと一緒に何かを試したりできる“交差点”を日常の中につくります。

その土台を支える仕組みとして、個人版ふるさと納税で新しい活動を立ち上げる資金を募り、企業版ふるさと納税を活用して地域外とも協働するルートを整えます。寄付や協賛を一時的な「支援」で終わらせず、まなびとらしい“関わりしろ”—参加・学び・仕事など多彩な形で循環させることが目標です。

こうした動きを束ねるキーワードは、今年あらためて言語化したミッション—「やりたいことが見つかるまでの〈待ち時間〉を届ける」。まだ出会っていない人たちとも、この価値を分かち合いながら、子どもも大人も「自分らしさ」を育める地域福祉と地域経済の循環を描き続けます。

今年も活動を支えてくださったすべての皆さまに、心より感謝申し上げます。どうぞ2025年度も、変わらぬ見守りと気軽な参加で、まなびとの歩みに寄り添っていただければ幸いです。